

運動の心地よさを味わい、技能を高めるための  
「わかる」を追求していく体育・保健体育学習

1 体育科における子どもに備えさせたい資質・能力

体育における学習場面には、運動に向かおうとする場面、身体を動かす場面、よりよく運動していくための課題解決をしていく場面がある。場面ごとにまず、「やってみたい」という思いをもつことが必要となる。その思いは、子どもたちの追求欲求を刺激する教材との出会いや、仲間との学び合いによって引き出される。また、運動やスポーツが心身の発達に与える効果について運動の科学的知識を学ぶことも重要と考える。その上で、課題は何なのか、どうしたらうまくできそうか、動きを見合い、話し合うことで学習内容の核心である課題解決に向かっての仲間との学び合いが促される。下記は、小学校5年生タグラグビーのふりかえりである。

空いているスペースに動くことを意識してゲームをしたけど、3対3のときはボールをパスするつもりでふりをして、相手が向こうに行ったとき、空きスペースが出てきてそこで点が入ったので、見つけるにもいいけど、作るのもいいと思いました。(児童A)

児童Aは空間を見つける動きの中で、空間を作り出すことに目を向け始めており、次時以降の学習課題を設定するポイントとなった。自分のやりたいことや解決したい課題をはっきりともつことができれば、学び合いがチームの中で自然に生まれ、より高めていこうとする考えや動きが次々出てくる。学び合いの積み重ねを通して、一人一人が「できる」につながる「わかる」を獲得していくことができる。その先には、自然と動き出したり、できるようになるために思考を巡らせたりする子どもの姿が表れ、さらなる「できる」を得ていくことであろう。本学校園体育・保健体育科における子どもに身に付けさせたい資質・能力とは、以下の通りである。

技能構造を追求し、考える力  
自分や仲間の姿を観察し、思ったことを言葉や身体をつかって伝える力

『技能構造を追求し、考える力』とは、『身に付けたい動きがどうしたらできるようになるのかをこれまでの運動経験や学習経験をといた学びをつなげて考える力』だととらえている。

子どもたちは「わかる」「できる」「かかわる」ことを大事にして学びを深めていく。その際、『自分や仲間の動きを観察し、思ったことを言葉や身体をつかって伝える力』は欠かせないと考えている(図1)。

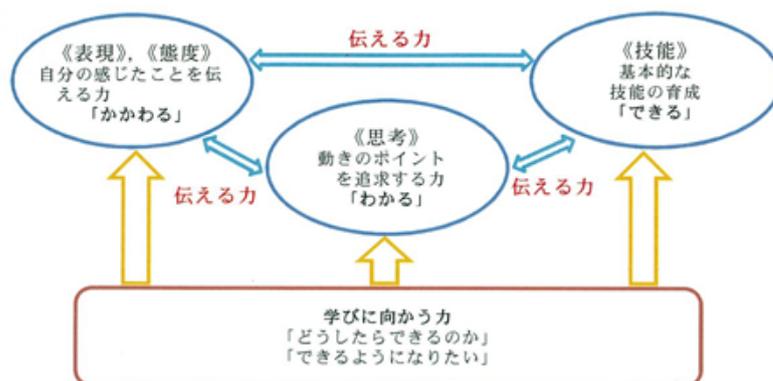


図 1

## 2 資質・能力を育むために

### その1 付けたい力を明確にし、系統的に学習できる授業づくり

体育学習では、付けたい力を明確にして、系統的に授業を構想することにより、『技能を高めるために、動きのポイントについて考える力』、『自分や友だちの姿を観察し、自分の考えたことを伝える力』がつくと考える。それは、過去の運動経験と結びつけて考えたり、同じような動きを見つけたり、似ている学習方法を再度したりすることで、子どもたちは学びをつなげ、力をつけていくことができる。

3年生の「プレルボール」を例に挙げる。子どもたちは、「たくさん得点を取りたい」という思いをもち、どこにボールを投げ込んだらいいのか考えるであろう。そのとき、子どもたちは、2年生時に学習した、「隙間をねらって、その場所に走り込むとよい」という経験をもとにして、ねらう場所を考えると予想される。過去の運動経験と「プレルボール」の学習を結びつけるはたらきかけを行うことで、子どもたちの思考が深まり、「空いているところを見つけて投げ込む力」が高まっていく。このように、身に付けさせたい力を考えて単元を構想し、過去の運動経験とのつながりを考えて、学習を進めていくことで、資質・能力を身に付けることができると考える。

### その2 子ども自ら問いをもち、技能を高めていく学び合いの場を設定する

本校学校園の体育科における問いとは、『「やってみたい」という思いをもとに、どうするとよりよくできそうか課題を解決する方法を見いだしていく中で生まれていくもの』と考えている。その方法を実際に試していくことで、問いがさらに深まるとともに、学習段階に応じた動きが「わかる」ことや技能の向上が図られる。

本学校園の体育の授業は、図2で示すように、予想（前時のふりかえりをもとに）→ 1回目の試行・批評（小集団）→ 説明・予想（学級全体で）→ 2回目の試行・批評（説明・予想をもとに）→ 見いだす（次の課題へ）という流れを大切にしている。このような学びの中で、子ども自ら問いをもつためには、学級全体や小集団（ペアやグループ）での学び合いが大切になる。映像を見て友だちの動きと比較したり、自分の動きについて、友だちから助言をしてもらったりすることで、自分では見ることでできない自分自身の動き（自分ができていること、できていないこと）に気付くことができる。また、そこから、「もっと高く跳ぶためにはどうしたらよいか」といった、個々の技能を伸ばすための具体的な課題が生まれ、主体的に活動に取り組むことができる。このような学習過程を通して、思考力・判断力が高まり、技能を向上させていこうとする姿につながっていくと考える。

また、自分の思ったことや考えたことを表現する力を高めるために、表現する機会をつくることで、さらに動きが「わかる」ことや技能の向上につながると考える。「見合う視点を設ける」、「新たな気付きをつくり出す、発見するための工夫をする」などといったはたらきかけをすることで、伝える力を高めさせたいと考えている。

（文責 三島 康紀）

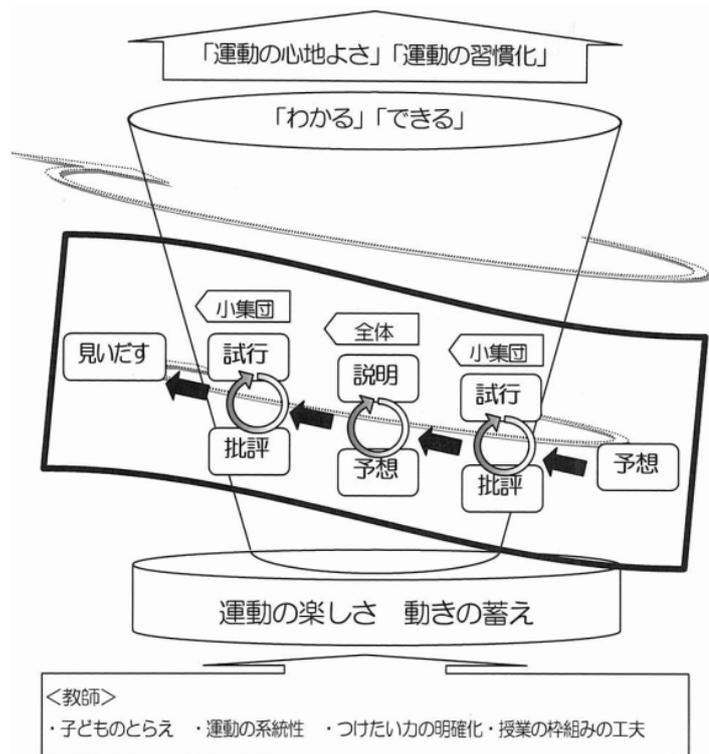


図2

